

2001年度渥美奨学生のページ

Borjigin, Burensain 「やさしさへの誤解」-----

範 建亭 「母のような存在」-----

金 香海 「今までにあなたに一番影響を与えた人はだれですか」-----

全 振煥 「備えあれば憂いなし」-----

蒋 恵玲 「卒業式を終えて」-----

Kostov Vlaho 「どうして、今、技術が人間性よりもこんなに早く進歩することになったのでしょうか」-----

李 炫瑛 「教える先生、研究する先生」-----

李 英淑 「子どもたちの瞳」-----

梁 興国 「生命の意義」-----

Lwin U Htay 「私に影響を与えた人」-----

奇 錦峰 「私に一番影響をくれた人」-----

Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko 「アヒル飼いの子」-----

やさしさへの誤解

ボルジギン プレンサイン
Borjigin, Burensain

早稲田大学 博士（東洋史）
早稲田大学モンゴル研究所客員研究員
日本学術振興会外国人特別研究員

娘が小学校に通っていたころ、よく学校に行き子供たちに「国際文化理解講座」をしたものである。いうまでもなくモンゴルの文化や暮らしが話題になったが、「何故モンゴル人はあんなにかわいい羊を殺して食べるのか」という質問や、「モンゴルの子供たちはかわいそう、自分の大好きな羊が殺されるのをじっと見ていなければならないだなんて」などという疑問をよく聞かされた。そこで私は、「例えば皆さんが食べる牛肉はスーパーで綺麗に包装しておいてありますが、もともとは屠殺場の人大きな牛さんを殺してその肉を売っているものですよ」といちいち答えたが、しかしこんな常識的なことは幼稚園のころからすでに教えられているはずだと思って、「子供たちを一回屠殺場でも見学させたら如何ですか」と先生に勧めた。しかし先生は、「そんなことは子供たちにあまりにもかわいそうではないか」といわれた。私は愕然とし、なぜ私たち人間の生活が成り立っている仕組みを子供たちにありのまま教えないのかと思った。

日本では、生徒にやさしく接することが常に近代的な学校教育の重要な内容であり、民主主義教育の一大象徴にもなってきた。そのおかげで日本の子供たちは世界でも例のないやさしいこころの持ち主になった。しかし、果たして人間の営みの一部を隠すことによって、やさしいこころを育てることが可能であろうか。動物をかわいがる私たち人間は、羊や牛などのようなおとなしくてかわいい大型動物の肉が大好きな人間でもある。人間が抱えるその矛盾を子供たちに素直に教え、生活の隅から隅までを知ってもらい、目で確かめながら育てる必要があるように思う。子供たちに生活感や現実感を与えられない都会的な生活環境では、私たちは昔より何倍もの努

力を払って子供たちにこれらを知らせなければならぬと思う。

どこの国でも人間は常に平和と豊かさを求めてきたものである。戦後、日本人は戦争の教訓を吸収し、一所懸命働いて今日のような平和で豊かな社会をつくりあげた。そのおかげで日本の子供たちは世界でも一番恵まれた環境に育てられている。その環境で自分の娘が教育を受けられていることに私も喜びを感じるが、しかし、生活感覚のない成長ぶりに心配することもある。平和と豊かさは人間にとって最も重要な生存条件ではあるが、しかし時には人間としての感覚を鈍らせるマイナスの効果もあり、一歩間違えば判断力に欠けた人間を育てかねない憂いもある。

モンゴル人は肉が大好きである。それにより昔は農耕民族の人々に野蛮だと思われてきた歴史もあった。日本は伝統的に大型動物の肉を食べる文化はなかったといわれているが、今はそうではない。

教育現場では、「やさしさ」に対してどこかで誤解しているのではないかと娘の教育に係わる中で時々思う。

母のような存在

はん けんてい
範 建亭

一橋大学大学院経済学研究科（国際経済学）

人はだれでも周りの人からさまざまな影響を受けながら成長し、特に幼い時に与えられた影響はその後の人生に持つ意味が大きいだろう。僕は生まれつきの独り善がりのせい、他人からあまり影響されないタイプであるが、これまでの人生を顧みると子供の時の出来事はやはりいまの自分と重なる点が多いと思う。僕に強く影響を与えたというより、自信と勇気を持たせてくれた人物がいる。小学校時代のクラス担任の先生である。

先生の名前は駱といい、僕が小学校三年生の時他校から転勤して来られ、クラスの担任兼国語の先生

となった。駱先生はとびきりの美人とはいえないが、子供の目から見ても魅力的な 30 代の女性で、前任の先生とは正反対のタイプであった。語り口はとても優しく、学生とも親しくなりやすい一方で、あれこれいたずらをする生徒に対して結構厳しい先生であった。僕が通った小学校は下町の子供ばかりのところで、クラスの中には悪ガキが一杯いたが、駱先生の前ではみんな妙におとなしくなっていた。クラスの雰囲気も一変した。当時は、「文化大革命」の真っ最中で、学校教育が崩壊されつつある状況にあり、受験勉強はもちろんなかったし、教科書も全然面白くなかった。そういう環境の中で、真面目に勉強する学生も、熱心に教える先生もあまりいなかった。とはいえ、駱先生はわりと教育熱心で、教え方もなかなか上手だし、いつも学生の興味をそそっているから、授業中は前任先生よりずいぶん静かになった。

小学校の先生はだいたい子供に対して親に次ぐ影響力を持つと言われているが、駱先生は僕にとって親と同じぐらいか、それ以上の存在であるかもしれない。僕の両親は 4 人の子供を食わせるために精一杯に共働いており、しかも学校の教育をあまり受けていない人だから、子供の勉強に対してそれほど余裕も熱心さもなかった。僕は勉強好きとは言えないけれど、国語が得意だったので、先生の国語授業はもっとも好きな時間となった。いつも一番に手をあげ、いつも一杯褒められていた。特に自慢の作文は範例としてしばしば皆さんの前で発表され、小学校卒業までは国語だけが全部優だった。そのころ、僕は将来作家になってやろうと夢を見ていた。小説を貪るように読み、写したノートは 10 冊ぐらいもあった。大人になってから、自分は作家の才能がまったく無いと実感したが、読書の習慣が子供のころから植え付けられ、いまも本を読むのは何よりの楽しみだ。

ところが、中学、高校に入ると僕はだんだん不勉強になり、人生の道に迷っていた。成績が悪くなる一方の僕は駱先生を訪ねる勇気があまりなく、ほとんど連絡しなかった。社会人になって、駱先生の引越しがきっかけで連絡を取るようになり、毎年、必ず何回か先生の自宅を訪問していた。そのとき、駱

先生はもう僕を子供としてではなく、友達のように遇してくれた。悩みの相談にも乗るし、また昔と同じように会うたびに僕を励ましてくれた。

僕が日本に留学してから、駱先生は僕の家族や友人よりも頻りに手紙を寄せてくれた。その暖かいメッセージを読むことは、厳しい留学生活の中での少ない慰めの一つであった。僕が日本で大学に入って新しい学問に挑戦したこと、大学院に進学したこと、奨学金を獲得したことなど、先生は誰よりも喜んでくれた。博士課程に進学するかどうか迷った時、先生は「君ならできるよ」と勇気づけてくれた。そして 3 年前、僕が結婚した時、駱先生は母のように祝福してくれた。両親がすでに亡くなっていた僕にとって、その感激はとても言葉に尽せない。

いま、僕の長い留学生活がそろそろ終わろうとしている。これほど学問に没頭していたのは自分でも信じ難いが、思えば、その原点には子供の時に植え付けられた勉強に対する情熱と自信があるに違いない。それは駱先生の励みと熱い期待によるところが大きいと思う。学位が取れたら、誰よりも先に駱先生に報告したい。

しかし、実は僕はいま駱先生のことを考えると耐え難いほどの不安に包まれる。何年か前、先生は乳がんとなり、早期なので手術によって命に別状はなかったが、退職して自宅で療養されていた。だが去年から、先生からの便りがまったく無くなった。いつもの年賀状が届かないし、僕の手紙にも返事がなかった。どうしたんだろう、苛立っても僕は電話をかける勇気はない。先生はまだ元気であると僕は信じたい、祈りたい。

僕が日本にいる 10 年あまりの間に中国は大きく変身した。かつて通っていた小学校や長年住んでいた町は、凄まじい経済発展とともに全部壊され、跡形が何一つも残されていない。それゆえ、子供の頃の懐かしい思い出も多く失われてしまった。しかし、単なる僕の小学校の先生ではなく、まるで母のような存在である駱先生のごことは、決して僕の記憶から消える日はない。

今までにあなたに一番影響を与えた人はだれですか

きん こうかい
金 香海

中央大学 博士（政治学）
中央大学社会科学研究所研究員

このテーマを目にした瞬間、非常に心を引っ張られた。というのは、学問の道を志して日本に渡ってから、もう7年という歳月が流れ去った。正直なことを言うと、この7年間はまさに暗いトンネルの中を潜るようにして、先に見える明りに向かって合理的に動くのが精一杯で、実際にこのようなロマンチックなことを考える暇はなかった。今になって、やっと目標に辿り着き、神経のバネが多少緩めになってから初めて、このテーマについて興味が生まれたのであった。しかし、だれが自分に一番影響を与えたかについて、まだ良くわからなくて呆然とする。原因は、自分がいろいろな時代を経験し、いろいろな価値観の教育を受けてきたからである。私は、長閑な朝鮮族の村で育ち、大学では悠久の中華文明に薫陶され、今は日本の現代文明の洗礼を浴びている。伝統的な社会主義、社会主義市場経済、現代資本主義などそれぞれのイデオロギーは、周期的に影響を与えては、また消えていくものであり、その度に影響を受けた人もまちまちであった。しかし、自分自身が受けた教育の知的刺激だけは、時代の変化とは関係なく、ずっと心に残っている。

私は、今までの人生の長い旅の中で数多くの先生にお世話になった。この中で特に、金明子、劉享九、滝田賢治の諸先生の御名前は忘れるわけにはゆかない。金明子先生は、私の小学校時代の担任であり、表情は険しくその顔だけを見ても私達は怯えていた。ある日、同じクラスメートと一緒に川に遊びにいった。授業時間に遅れ、先生に髪を掴まれ、壁に叩きつけられたことは今でも覚えている。しかし、先生は生徒の目に埃が入ると、舌で舐めてとってくれたり、寒さに生徒の顔が赤く凍ると、自分のマフラーで包んでくれるなど意外にやさしい時もあった。性格は別として、先生の教え方はほんとに刺激的であ

った。われわれに目玉がぐるぐる回るほど、もっと広く、もっと深く、もっと正確にと考えさせる。また、われわれを農村や工場を見学させたあと、その感想をすぐ作文にさせる。自分の思考方式の基礎はその時に築かれたものであるという点に関しては、今になっても疑わない。

劉享九先生は、私の高校の担任である。先生は穏やかな性格の持ち主であるが、勉強をしない学生に対しては特に厳しく、勉強する学生には非常にやさしい方であった。私が編入されたのは浪人が多い予備クラスで、とても勉強する雰囲気ではなかった。しかし、先生がきちんとクラスの秩序を整理し、勉強できる環境を作ってくくださったお陰で、私は大学に進学することができ、これがまた人生の一里塚となった。先生とは個人的にも親交が深く、大学に在学中にも千里の旅にも拘らず私に会いにきてくれたり、いろいろなお土産を送ってくれた。今でもお手紙を下さり、いろいろ励ましてくださる。

滝田賢治先生は、留学という特別な環境で知り合い、その付き合いも一番長く、しかも日本での先生であるという点で影響が一番大きい。中国の大文豪の魯迅と藤野先生との伝説的な師弟関係には及ばないけれども、それでも先生には、学問だけでなく、日本文化、生活習慣、人との付き合いなどまで一から教わるなど、まさに異星人を地球人に改造するご苦労をしてもらった。そのため、先生には大変ご迷惑をかけ、今でも申し訳ない気持ちで一杯である。厳しく叱られ、恥ずかしい時もあれば、心を暖かくしてくれた時もあった。しかも、学問についてはほんの小さいところまで容赦なく、聖なる博士号を取得するまでずっと見守ってくださった。先生から教わった正確な判断力、速やかな行動力および課題に粘り強く取り組む精神は、私が日本社会だけでなく、あとの残りの半生を泳いでいくための宝物である。人類は、先に教わって教えるという知的生態循環を通じて知識を伝える。そうしてゆく中には、先生達の心血がこめられている。それに対する崇敬の心情は時代が去っていても永久に人の心に残るものだと私は思う。

備えあれば憂いなし

ジョン ジンファン
全 振 煥

東京工業大学 博士（環境理工学創造）
鹿島建設株式会社技術研究所研究員

工学研究者として建築の道に入ってコンクリートと共に歩んだ10年が過ぎました。私がこの道に入る時、大きな影響を与えた方が大勢いました。その中でも一番私に影響を与えてくださった方は、私の韓国の大学の指導教官の南宰鉉先生です。先生はいつも温かな性格でいらっしゃいましたが、研究については厳しい先生でした。学問だけではなく、人生の道についても強く影響を受けました。現在の私がここにあるのは先生のお蔭です。

1992年建築工学部を卒業するにあたり、私は進路の問題で悩みました。学歴を高めるため進学するか、あるいは就職して社会経験をつむかの二つに悩みました。出来れば、社会経験を得ながら勉強を続ける、両方満足する道があればいいと思っていたところ、私により便りが参りました。それは、専攻学科の助手という仕事でした。どうするかを悩んでいた時、当時学科長だった南先生に相談にのっていただきました。その当時、あまり先生とのお付き合いはなく、ほとんど授業時間だけのお付き合いでした。先生の専攻は、私が常に興味を持っていた建築材料と施工科目でした。特に、先生は韓国で初めて建築材料としてコンクリートに使われている高性能減水剤を開発して実用化し、施工性を向上した方でした。

相談にのっていただいた際、一番心に残ったお話は、「自分の将来についてどちらかを選択する重要な瞬間と、どちらを選択するかを悩むときは、自分の心が向かう方向に決めるのが一番よいのではない。しかし、どちらを選んでも一生懸命やりなさい。それが後悔しない人生になります。」と、さらに「常に自分を啓発する姿勢で暮らさなさい。そうすればいつ、どこで、なにがあってもすぐ対処できるし、

どんな苦しいことも克服できるだろう。」とおっしゃいました。このときの言葉が今も私の心の中に残っています。

その後、私は助手の仕事を決め、働きながら南先生の生徒になりました。

進学とともに毎日朝7時から1時間の勉強会があり、仕事との両立はつらいことでしたが、これも学問の道に入るひとつの段階である、さらに準備がしてあれば後の自分の将来につながると、我慢して頑張りました。大学院の学生数が少なかったため、まるで家族同様な大学院生活でした。しかしながら、しばらくして、私は新しい壁にぶつかりました。私の母校ではあまり実験室に試験装置と設備等が整っていなかったため、さらに研究を進めていくのが困難な環境でした。そのため、他の大学の試験装置を借りて使ったり、あるいは試験体を持って他の大学で試験を行ったりということがたびたびありました。やりたい試験が沢山あっても出来ないということは、私にとってとても苦しいことでした。そんなとき、いつも先生から希望を失わず頑張るようにと、勇気と力を吹き込んでいただきました。そして先生に、私がかねてから考えていた留学のことも話しました。私は留学に対して夢を抱いていました。

私が日本へ留学する際、南先生からの最後のお言葉はこうでした。

「世界は広い。だから、自分の視野も広げなければならぬ。一緒に仕事をしたいが、もっといいところに行って勉強しなさい。数年後には一緒に研究をしましょう。」

最後に私が先生から習ったコンクリートの話を紹介します。「コンクリートを作ることは単純ですが、作り方によって良いコンクリートになるか、あるいは悪いコンクリートになるかが決まります。さらに、使用する際にその機能によって用途が変わります。人生においても同じことがいえます。自分をどう作っていくかによって自分の未来が変わるでしょう。」

卒業式を終えて

しょう けいれい
蔣 恵玲

横浜国立大学 博士（電子情報工学）
（株）NTT ドコモ無線ネットワーク開発部研究員

3月26日、例年より早く満開を迎える桜の中、私は9年に渡り過ごしてきた留学生生活にピリオドを打ちました。10年ほど前に来日し、日本語学校、大学、そして大学院を経て、学位を取得し、晴れて卒業することになりました。

振り返ってみると、来日した当初は、これからの生活に対して、不安な気持ちがいっぱいでした。来日前に習っていたおかげで、日本語の基礎的な文法はそれほど苦労しなかったが、聞き取りがまったくできなく、もちろん話すことにもコンプレックスを持っていました。大学受験は、日本語との戦いでもありました。でも、そのプレッシャーのお陰で、受験が終わった頃には、だいぶ日本語も慣れてきました。

大学に入って、すぐに友達がたくさんできました。最初は同級生との雑談で、日本語の見えない壁によって、どうしてもタイムラグが発生してしまいましたが、そのうちみんなとストレスを感じなく会話ができるようになりました。専門書の難しい日本語に悩まされたことがあり、実験のレポートで徹夜がしばしばの時期があり、留学生寮の友達と夜を徹して話に夢中になった時期もありました。すべてが懐かしい思い出になりました。

研究室に配属されてからは、いままでと違った生活を送るようになりました。初めて自分がイメージしていた大学生活が体験できた気がします。卒業研究のテーマを渡された時に、どこから始めたらいいか、どうやって始めたらいいか、さっぱり分かりませんでした。それでも一年のうちに研究生生活に慣れ、学会発表も行くようになり、急激に変化した一年でした。

大学院に入ってすぐ、先生から「新しいテーマを始めてみないか」と言われました。最初は果たして

目的を達成できるか不安でいっぱいでした。毎日のようにプログラムリストとにらめっこをし、一つ一つバグを取っていく日々でした。バグが見つかった時の達成感を味わうのが好きで、ますます研究に没頭するようになりました。知らず知らずそのまま博士課程に進み、本日に至りました。

この9年間には、いろいろな変化がありました。自分は将来にまったく自信のない一人の女の子から、結婚して妻になり、そして母になりました。子供を授かった時から、更に自信を持つようになりました。9年間の留学生活で、私は家族といっしょに過ごす日々を犠牲にした代わりに、自信、自立、友達など、多くの物を手に入れました。そして、卒業証書を手に入れ、新しい生活を始める本日、もう一度これまでの生活を振り返ることにしました。

今日は新しいスタート点に立っています。これからは一社会人として生活していきます。自分の目指している目標、そしてなりたい自分に向かって、頑張りたいと思います。

どうして、今、技術が人間性よりもこんなに早く進歩することになったのでしょうか

コストブ フラホ
Kostov Vlaho

東京都立科学技術大学 博士（工学システム）
東京都立科学技術大学客員研究員

20世紀初頭より、飛行機、ラジオ、テレビなど、人類は数知れない大発明を経験したが、現代におけるパソコンとインターネットによるIT革命ほど、社会に大きな影響を及ぼしたものはない。今や、私たちが自分自身で気づきもしないほど、ITは毎日の生活に及んで生活に不可欠なものとなり、私達のまわりでITがどんどん広がっていても気づかなくなってしまっている。将来的に、ITは、ますます見えなくなり、ユーザーとの接点は殆ど感覚的になるだろう。

社会に、さらに詳しくいえば社会の発達過程に、情報が与えた影響や、情報自体や情報技術（IT）が与えた変化を正当に評価するのは、非常に複雑な課題である。何人かの科学者は、情報が与えた影響を「情報を使ことによって自分がやりたいことを達成できる力の変化」と定義した。ビル・ゲイツや他の学者は、パーソナルコンピューターがどの家にも普及し、私達の毎日の生活が全く変わってしまうだろうと予測した。いずれにせよ、インターネットは、既に、私達のコミュニケーションの仕方、社交の仕方、余暇の過ごし方、勉強の仕方、買物の仕方まで、大きく変えてしまった。

間もなく、ITは、いろいろな面で、一般の人々にも大きな影響を与えることになるだろう。どこでもコンピューターが利用できるようになり、ユーザーはどこに行っても情報端末を使うことができようになるだろう。人と人、人と機械、そして機械同士のコミュニケーションがますます円滑になるだろう。間もなく、全てがネットワーク化され、ひとたびデータや情報が入力されれば、再入力の必要はなく、いつでもどこでも取り出すことができるようになるだろう。自然科学の分野では、ある人から発信された計算結果や知識は、洗練したコミュニケーション機器とコンピューターを使った共同作業によって、人類の知恵を共有することが可能になっている。今日ほど早く、そして簡単に、情報を交換したり探索したりできたことはない。社会のグローバル化のおかげで、物理的に遠距離の地域同士、違ったタイムゾーン同士、違った文化背景を有する人々の間の共同作業やコミュニケーションが急激に増加した。

しかしながら、インターネットは従来の情報発信と受信の方法やビジネスの方法を完全に変え、歴史的に一番素晴らしい富の創造の時代に導きつつあると言いながらも、情報を持つ人と持たない人の格差は増すばかりである。しかも、発展途上国と先進国の間の、ICT（情報とコミュニケーションの技術）の格差は、収入と福祉の格差よりも広がっているようだ。インターネットどころか、この世界に住む人々

の大部分が、電話のダイヤル・トーンを聞いたこともないのだ。新しい情報技術を使える人々の数は、全世界の人口からするとほんのわずかに過ぎず、その大部分が先進国に住んでいる。

従って、世界中の貧しい人々を情報革命から除外してしまう危険は非常に現実的な問題となっている。仕事、家、食べ物、健康管理、飲み水など、様々な基本的生活要素を欠く人々にとって、基本的テレコミュニケーション・サービスからも除外されてしまうことは、他の要素が略奪されているのと同様に重大な問題であり、実際、状況改善への道を閉ざしてしまうことになりかねない。お金持ちはインターネットの恩恵も最大限に受けているのに、新しい技術は、それを一番必要としている人にとって、一番遠いものとなってしまっている。発展途上国におけるインターネットの最大の影響は、新技術の利用ではなく、非利用といえるかもしれない。

インターネットの非利用が続くと、発展途上国は、電気回線整ったグローバルな市場の競争に追いつけなくなる。そして、既に電子ネットワーク化されているグローバルな知識を備えたシステムにますます参加しにくくなる。その上、知識が足りないということと、他の人に比べて知識が足りないということを知るといえることは、それぞれ別の意味を持つのだ。インターネット非利用の発展途上国は、先進国と比較されることを心配しなければならない。

個人的にはグローバルな情報交換がもたらした迅速な変化や恩恵に非常に感銘をうけていながらも、世界全体の持続可能な開発のために、もっと大胆な情報技術や知識共有化の戦略を通じて、情報革命の恩恵をグローバルな社会の発展や成長のためのパワフルな手段として使わなければいけないと常に考えている。

教える先生、研究する先生

イ ヒョンヨン
李 炫瑛

お茶の水女子大学 博士(比較文化)
韓国外国語大学校日本語学科非常勤講師(在ソウル)

ソウルで迎える春は、八年ぶりだ。

8年間、色々変わったかも知れないが、韓国の春は今年も相変わらずだった。野山にはれんぎょうの花と躑躅の花が咲き乱れ、街には淡いパステル色の服に着替えた人々が溢れている。暖かくて過ごしやすい日々が続いている。しかし、そんな穏やかな日々を嫉妬するかのように、急に中国大陸から吹き上げられた黄砂が風に乗って到来し、全国は砂埃で何日が憂鬱な日が続いた。

去年の8月に帰国した私は、いま母校を始め、幾つかの大学で日本語と日本文学、日本の文化について講義している。留学する前、大学院を出たばかりの頃にも大学で教えた経験がある。あの時は、いろんな面で未熟な自分自身が不満でいやだった。「まだ勉強が足りないのに誰かの前で教えるなんて、とんでもない。」何をやるにも自信がなかった。心の中には常に学問に対する渴きがあった。

もっと勉強しよう、留学しよう、と決めた。

1994年4月4日、家族と友人に見送られながら東京に向かう飛行機に乗った私は、希望と不安でいっぱいだった。留学を実現した喜びとこれから本格的に専門の研究が出来るという嬉しさ、期待感、好奇心、そして異国で始める生活に対する負担感が混じり合っていた。今、振り返って見ると、7年半の留学生活はそんなに甘くはなかった。でも手取足取りで何から何まで教えてくださった先生と友人のお陰で乗り越えることができた。博士論文を終えた時の充実感と満足感は、いつの間にか周りの皆さんに対する感謝の気持ちに変わっていた。

久しぶりに青い空が顔を見せたある日、私は電車に乗っていた。母校で講義するために学校に行く途

中だった。ふっと車窓越しをみると、両線路側に黄色いれんぎょうの花が咲き乱れ、日差しに輝いていた。すでに春はここまで来ていたのだ。両手いっぱい、授業のための資料を持っている自分を発見した瞬間、留学時代、長年指導を受けていた先生を思いだした。

私は先輩の紹介で、留学した2年目から早稲田大学の、ある先生の研究室に聴講に行っていた。その先生は、いつも授業の前に、先生に送られてきた一週間の新刊や論文、それから展示会や催し物を紹介する。それだけではない。毎週金曜日の午前は必ず古書店に足を運び、見つけた宝物を学生に紹介する。たまに研究室の学生の専門と関係ある本を見つけると必ず用意してその学生に渡す。約350年前の「おくのほそ道」板本をはじめ、時間とお金をかけて集めた貴重な板本、短冊、書簡を惜しまず触らせてくださる。「直接触れないと江戸時代の人々の息吹を感じる事が出来ない」とのことだ。一留学生の私にもお持ちの資料は何でも見せてくださるし、研究に必要な資料は何でも提供してくださる。授業だけではない。多忙にもかかわらず月に一回は必ず様々な展示会に学生を連れて行って丁寧に説明してくださる。先生の研究だけではなく、学生の研究をも積極的に指導してくださる。その上、学校に来る時は、いつも両手に大きな紙袋を持っている。全部、授業のための資料であるに違いない。見るからに重そうだと思ったことが何回もある。

ある日、先生は「自宅の梅の花が咲き始めたから花見に来ないか」と研究室の学生たちを誘ってくださった。もちろん私も研究室のみんなと先生のお宅を訪ねた。お宅まで2時間以上もかかるころだった。先生が、そんなに遠いところから通っておられたとは全く知らなかった。そんな遠いところからいつも学生のため、両手いっぱいの資料を準備して来ておられたことが分かった瞬間、私は感動し、頭が上がりなかった。

以前から、私は大学で教える人には二つの義務と責任があると考えてきた。その一つは、学生にいい先生になることであり、もう一つは絶えず学問する

研究者になることだ。そのような覚悟のない研究者には大学の先生になってほしくないと思う。

留学時代、私は理想の先生の姿を発見した。

帰国するまでの6年間、その先生の指導を受けたことを誇りに思っている。こんなに立派な先生のもとで勉強することを許してくださった先輩と先生に心からお礼を言いたい。学生を教える立場になった今、その先生の姿を理想とし、授業のある日はいつも両手いっぱいの資料を持って学校に向かっている。でも、まだ真似をしているだけかも知れない。理想の先生になれるまで努力するしかない。

子どもたちの瞳

李 英淑^{リ ヨンスク}

筑波大学 博士（教育学）

釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師(在釜山)

「今まであなたに一番影響を与えた人はだれですか」を考えるうちに子どものときに読んだ壺井栄の文学『二十四の瞳』（1952年）を思い出した。家の本棚にあった児童文学選集に入っていた『二十四の瞳』を取り出して読む前までは、タイトルから予想して何かの推理小説だろうと思い、期待に満ちて読み始めた。しかし、戦争も知らなければ、日本の文化も知らない小学生だった私にとっては、この小説は期待はずれのもので、何の感動も残さず記憶の奥のほうにほうむってしまった。このような小説が今になって気になる理由は、きっと第二次世界大戦という時代背景の中で生きて行く12人の子どもの存在からであろう。師範出身のエリート新



米女教師「大石先生」が瀬戸内海の小さな島に赴任し、はじめて受け持った12人の子どもたちを教え、一方では子どもから学ぶ、約二十年間の生き方を描いたこの物語では「二十四の瞳」が輝いている。

私の場合、現在このような研究の道に導いてくれたのは、現職で教えたときの子どもたちの教えである。たとえば、筆者が教師になったばかりのころのことで、中学校2年生に連立方程式の活用を教えるときの出来事がそれである。韓国では中学校2年生の方程式と不等式の単元で、連立方程式を指導するようになっている。連立方程式の活用問題として代表的な問題の一つは、「牛と鶏が合わせて15頭います。足数の合計は52本です。それぞれ何頭ですか」というものである。日本ではいわゆる鶴亀算と呼ばれるこの問題は、形式的な連立方程式のみではなく、面積図を利用したり、表を作ったり、試行錯誤的なアプローチをしたりすることなどの多様な解決法をもつ問題である。しかし、連立方程式の解決法が分からないという理由で、すぐにあきらめたり、挑戦さえしない生徒が意外と多いことに悩んだことがある。自分がもっている知識や情報のみを使って、十分に解ける問題さえも、すぐあきらめてしまう現実の子どもにがっかりした記憶はいまでも鮮明である。そこで、数学的知識の教え込みよりは自分で問題を感じ、その解決をめざして、自分の力を出しながら考えようとする子どもを育てたいという希望で、筆者は数学的問題解決の研究をはじめたのである。一方、問題解決では上にあげたような多様な解決法をもつ問題がしばしば取り上げられるが、自分なりの他の解決法を試みた生徒がいたとしても、教師が期待しているその授業のねらいと合わないという理由で評価されないこともあり、そうした教師の対応自体も、あきらめてしまう子どもを生む一つの原因であると感ずるようになり、このことから、いろいろな解決法を出し合って、子どもどうして評価し合い、よりよい解決法を導くことができる環境作りも重要な要因であると考えようになった。

今は、一人ひとりの名前を覚えることはできないが、私が出会った一人ひとりの子どもたちの影響で、筆者は数学教育学の研究の道に入るようになったと

いえる。そして、小集団における子どもどうしの相互作用を中心とする「協働的問題解決」と呼ばれる主題を研究するようになった起源も私が出会った子どもたちにある。

生命の意義

りょう こうこく
梁 興国

東京大学 博士（化学生命工学）
日本生物系産業技術研究推進機構派遣研究員
東京大学先端科学研究センター研究員

「生命の意義は何？」という質問の答えは誰でも考えるだろう。しかし、その答えの重要性は十分に分かるにもかかわらず、生命の意義を知らずに世を去る方々が少なくない。生命の意義が分からなければ、人生の目的をはっきりすることが出来ない。たとえ生きることが出来たとしても価値のある人生はなかなか送れないと思う。

私に生命の意義を教えてくれた人は砂盛敬さんだった。彼は日本の中小企業の一つ、大成化工株式会社の専務だった。1995年9月に大成化工と中国の天津大学の協力研究が発足した。砂盛専務は日本側の責任者であった。当時大学院（修士）を卒業したばかりの私は、その協力研究の説明会に参加し、専務の分りやすく魅力的な説明に驚いた。その後、砂盛専務が日本の東北大学（1960年代）を卒業した博士であることを大成化工に勤めていた中国人の周さんから聞き知った。やっと専務が大学教授のような博学と風格であることの意味が少し理解できた。また、1997年9月までの2年間に、半年一回の研究報告会において、私は天津大学側の研究者として、専務の研究報告と見解を清聴することが出来て、だんだん専務に対する尊敬と敬服の感慨が強くなった。

1997年の11月に私は大成化工に来て、砂盛専務の指導下で厳しい研修生生活を始め、半年間で沢山のことを勉強した。特に、専務の仕事に対する真面目さ、研究の統率力、厳しさと考え方がだんだん分

かってきた。専務のことを知ることから、日本の戦後の奇跡的な経済発展の原因も少し理解できた。専務のように、毎日3~4時間しか睡眠をとらず、仕事に夢中になる日本労働者の姿が沢山あったのだろう。日本の現在の裕福と文明はほとんど彼らのお陰だと思う。また、大成化工の管理と運営にも非常に感心した。専務のおかげで、会社はまるで一つのロボットのように正確、健全に運行されていた。

専務が私によく言う言葉は、「中国は日本の先生だ」と「私は周恩来さんが一番好きだ」だった。特に周恩来のことに非常に詳しく、周恩来の「忠義」と「人民の為」に感心しておられ、「こんな素晴らしい人は唯一人だ」とよく言われていた。私も、周恩来が大好きだが、彼の影響がこんなに日本人々に及んでいることに不意に深く考え込んだ。そして「苦難の人間の為に仕事をするのは生命の意義だ」と思い始めた。もちろん、自分と家族の幸福の為に頑張る人たちを尊敬するが、社会と他人の利益を損なうことをしてはいけない。さらに、出来る限り美しい地球と、その上に住む人間の為に有益なことをすることは、人生の価値であると結論した。

周恩来は過労が原因で癌が悪化し1976年に逝いた。不幸なことだが、64歳の砂盛専務も同じく過労で長年の病気が重くなり、会社にさえ正常に勤めることが出来なくなった。今、毎週3日間しか会社に通わないが、家では毎日パソコンの前で6時間以上会社の仕事をしている。まるで、仕事は命より重要なようだ。病気になるまで仕事をするのは賛成できないが、会社の為、他人の為に仕事することは素晴らしいと思う。人間はきっとこのような精神を持って強くなり、自分の生命も大きな意義を持つようになる。歴史人物の周恩来と人生の先輩の砂盛さんから、私は生き方と人生の目標を明確にすることが出来た。

私に影響を与えた人

ルイン ユ ティ
Lwin U Htay

東京医科歯科大学 博士（医学）
ヒュービット ジェノミクス（株）研究開発部研究員

今まで生きてきた中で、私に影響を与えた人はたくさんいました。その中でも、一番影響を与えた人は母です。たくさんの思い出の中で一番印象に残っていることがあります。

私は子供の頃から何をするにも自分自身の考えが1番だと思っていました。5歳の頃、サッカーの試合の時、前から風邪気味で、当日は雨にもかかわらず自分の意志で出場してしまいました。そのため高熱が出て3週間入院し、学校を休むことになりました。母は毎日、仕事の帰りに病院に寄り看病し、朝は病院から出勤しました。私は、母に迷惑をかけ、また、監督や友達にも心配をかけてしまいました。そのような私の性格や行動を見て、そのころから、母は的確に指導してくれました。ですから、いつも母の意見に素直に従えるようになりました。私は母を尊敬しています。

リーダーとしてのいろいろな資格や経験などもあるからです。母は7歳の時、父親が亡くなったので、母親と妹との3人きりで生活していました。母は母親と妹のことをいつも考えていました。大学も断念し、高校卒業後外務省で公務員として働き、妹の大学の学費の面倒もみましました。その後、母は父と結婚し、3人の子を産み育てながら自分の家族のために働き続け、頑張って外務省でオフィサーにまで登りつめたのです。その間、母はいろいろな国々のミャンマー大使館に勤め、その国々の文化、習慣を学びながら私達に自分がしなければならないこと、守ること、禁ずること等たくさんを教えてくださいました。常に良きアドバイスをしてくれますので母の言った通りに従っています。母はいつも仕事で外国に出ていたのですが、一緒に生活したのは少年時代だけです。12歳の頃は、母の貯金でバンコクで勉強することができました。私は一生懸命勉強しました。そ

れだけでなく母の言ったとおりいろいろな外国語を勉強しました。おかげで今の私はマレーシア語、タイ語、英語、日本語、フランス語が話せるようになったのです。16歳の頃、将来のためにミャンマーに戻って高等学校に行ったのも母の薦めがあったからです。高等学校を卒業してから、医学部に入学しました。その時にも母は外国から私に月一回手紙を送ってくれました。手紙には料理の作り方、早く家に帰ることや、良い友達を作ることなどが書いてありました。そればかりか、私のために必要な医学についての本や資料を送ってくれました。その他、マレーシアで医師として働いていた時もいろいろな問題や患者さんのことを相談すると意見をくれました。日本に来てからもなかなか奨学金がもらえず生活が苦しかったけれども母は送金をしてくれ、また、頻りに手紙をくれて精神的にも助けてくれました。母の手紙は私には一番よく効く薬であると思っています。

今までの私の人生で、困難なことがあるときは母に相談し、その意見を交え決断していけば必ず私の人生に良い結果が得られているというわけなのです。ですから私はいつも母に感謝しています。

私に一番影響をくれた人

き きんほう
奇 錦峰

東京医科歯科大学大学院医学研究科（薬理学）

アルバジン先生は昭和十年代に日本の大学の医学部をでた初のモンゴル人で、私の恩師である。前世紀50年代の初め頃、アルバジン先生は内モンゴルへ帰り、ちょうどその当時に創立した内蒙古医学院附属病院内科の第一任教授として活躍していた。

私がアルバジン先生と初めに出会ったのは、自分が内蒙古医学院薬学部を卒業して、薬学部に残され、“見習助手”(準助手)になった年のことだった。ある日、私が図書館の和文文献コーナーで日本語の文献を調べていた時、横から「日本語が読める若者も

いるのだなー」という一人語が聞こえてきた。私はその年配の先生に、「大体の意味は分かりますが、まだ勉強中なので宜しくをお願いします」と答えた。この先生がアルバジン先生で、医学部、薬学部の外国語は全部英語なのに、日本語が読める者がいるということは不思議と思っていたらしい。この偶然の出会いがきっかけで、私はアルバジン先生と知り合いになり、その日からアルバジン先生との往来がはじまりました。

アルバジン先生はとてもやさしい人で、学問的にはもちろん、臨床経験も豊富で、日本語、ロシア語とドイツ語はご自分の母国語とおなじくらい詳しいし、英語も堪能である。アルバジン先生の弟子に対しての親切さ、学問に対してのまじめさなどに非常に感動した。当時、日本語を独学していた私は、暇の時、良く先生のご自宅にお邪魔し、日本語の会話をしていた。アルバジン先生からはたくさん教科書にない言葉の活用法を教わった。アルバジン先生の親切なご指導と自分の努力した結果、私は国家教育委員会の国費日本留学生の選抜試験に合格した。

前世紀 80 年代の半ば頃、アルバジン先生の提唱で、もう一人の友達と三人で、英、和、露、漢、蒙医学辞典を編集することになった。このことは、私の海外留学と、もう一人の友達の人事異動により中途半端で止めになってしまったが、一年ぐらいの間、アルバジン先生から多くの医学及び言語の知識を学ぶことが出来た。自分が今英語と日本語の医学用語を普通の医学及び薬学部を出た人より多く覚えているのは、この時期の勉強を否定できない。

中国の現代歴史上、文化大革命という分乱があったため、アルバジン先生は政治的迫害を一杯受け、最後は草原の田舎へ帰らせた。数年後に開放され、内蒙古医学院へ戻ってきたが、いろいろな原因で臨床のほうには戻れなかった。それにしてもアルバジン先生はコツコツ勉強し、著書、教育などに熱心に取り組んでいた。アルバジン先生は私に「モンゴル人の中に、君みたいな科学者は少ない。君はまだ若いからしっかり勉強して優秀な学者を目指して頑張れ」と良く励ましてくれた。アルバジン先生の生き方は私にとって、非常に良い教育と強い鞭撻になっ

た。三十歳過ぎた私が単身留学をし、博士号を狙ってこの数年間は頑張ってきた。自分の歩いてきた道を振り返ってみると、アルバジン先生に学問的にも、生き甲斐の面でも大変教わったと思っている。日本に来て七年目になるが、アルバジン先生とは今も連絡がある。アルバジン先生は八十歳すぎても頭脳がはっきりで、依然と、学者の風格は健在である。アルバジン先生の恩返しに、私は先生のように、学問には真面目、教えには親切で、大学の教壇と研究室に戻り、頑張っていくつもりである。

アヒル飼いの子

スリ スマンティヨ ヨサファット テトオコ
Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko

千葉大学 博士（人工システム科学）

千葉大学電子光情報基盤技術研究センター講師

24年前のことを思い出せば、ちょうど小学1年生で、父の転勤でインドネシアの西部ジャワ県バンドン市から中部ジャワ県ソロ市に引越しました。中部ジャワの方言、習慣などにまだなれていなかったころ、よくまわりの子供達からいじめを受けました。そのため、学校の勉強が出来なかったし、成績もいつもボリで、学校へ行くことすら嫌いになりました。さらに、父の仕事の関係で、空軍基地の団地で住まなければなりませんでしたが、不良子たちと接触することが避けられませんでした。まさに、様々な悪条件が揃っていました。そのため、親の知らないうちに自分が変な子になりました。小学3年生になった時、自分と親が校長に呼ばれて、成績の悪さなどを注意されました。そのとき、本当に怖くて、親の顔を見る自信もなくなりました。複雑な気持ちでいっぱいのまま、親と一緒に学校から帰る途中、緑豆のお粥店に寄りました。母はやさしく私の顔を見て、父も身体が震えていた私に甘いお粥を食べさせてくれました。

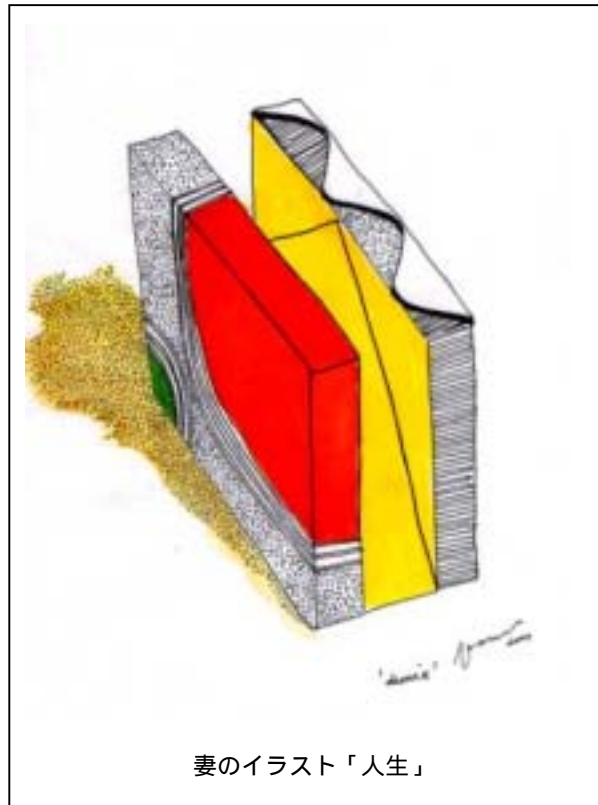
翌日、父はなかなか取れなかった休暇をとって、父がよく空軍学校の訓練生達と一緒に歩き回る田舎

へつれて行きました。突然、父が一軒の民家に寄って、私をその民家のご主人と子供達に紹介しました。民家の裏にはたくさんのアヒルがいて、やっとそのご主人がアヒル飼いであることがわかりました。その日から休日があると、すぐこの民家に遊びに行きました。

その後、アヒル飼いの子供と仲良くなり、よく一緒に田んぼ、川など泥にまみれるまでいっぱい遊びました。そのころから、自分は自然に関心を持ち、人間と自然が調和したところがこんなに美しいと思うようになり、現在もよく頭に思い浮かんでいます。

しかし、そのときよく不思議に思ったことは、この仲良しになった子はよく遊んでいたと聞いたが、いつも学校の成績が1番で、その田舎で最優秀の学生でした。これがきっかけで、自分は悪夢から目がさめるように、このアヒル飼いの子に負けたくないという気持ちになり、その日から勉強に力を絞って、今まで親をよく困らせた分を取り戻そうと決心しました。それから一年後、親、校長、町の住民などがびっくりするほど自分は学校の成績がビリから1番になりました。父がこの知らせを見たとき、自分の目には信じられないほど喜んでいました。母の目からも嬉し涙がぼろぼろ出ました。そして、父はこの通知書を当時なかなか買えなかったフレームに入れて父の部屋に飾りました。さらに、私が、子供のころからの海外に留学したいという夢まで実現できたことを一番嬉しく感じてくれています。

あのアヒル飼いの子と出会わなかったら、きっとこんな人生は送れなかったと信じています。今でも帰国するといつもこの子に会いに行っています。この子から自然の良さを勉強させてもらったおかげで、大学に進学してからレーダによる自然をモニタリ



妻のイラスト「人生」

ングするという研究に興味を持つようになりました。また、現在、地球資源観測衛星を利用して、アジア地域の自然をモニタリングしています。自然における様々な動植物の種類と生活もあの子が教えてくれたものです。アヒル飼いの子は私のヒーローで、いつも心の底に大切にしています。